

最近5年間の胃癌手術症例における年齢、 性別にみられる進行度の特徴

名古屋市立大学第2外科学教室

片岡 誠	榊原 一基	小林 端
本多 英邦	安藤 重満	堀田 哲夫
住田 紀夫	丹羽 伝	鈴木 正臣
原 臣平	古田 吉行	正岡 昭

CHARACTERISTICS OF DEGREES OF CLINICAL STAGE BY AGE AND SEX AS OBSERVED FOR OPERATED CASES OF GASTRIC CANCER IN LAST FIVE YEARS

Makoto KATAOKA, Kazumoto SAKAKIBARA, Tadashi KOBAYASHI
Hidekuni HONDA, Shigemitsu ANDO, Tetsuo HOTTA
Norio SUMITA, Tsutoh NIWA, Masaomi SUZUKI
Shinpei HARA, Yoshiyuki FURUTA and Akira MASAOKA
 The Second Department of Surgery, Nagoya City University, Medical School

胃癌手術症例を Stage, 手術根治度および絶対非治癒切除または開腹非切除例につき性別, 年齢別に検討を加えた。手術例数は885例, 男性65.5%, 女性34.5%からなる。手術例に対する治癒切除例の比は男性68.2%, 女性56.6%で, 絶対非治癒切除は男性24.2%, 女性36.2%であった。治癒切除率は男性では41歳から70歳までの各層ではほぼ70%を得ているが, 71歳以上80歳では51.8%に止っている。絶対非治癒切除と開腹非切除となった原因は腹膜転移, 漿膜浸潤, 肝転移, リンパ節転移の順に見られ, 肝転移は高齢男性に多く, 腹膜転移は若年者に多く見られ, とくに女性例で高率であった。

索引用語: 胃癌手術, 胃癌性別進行度, 胃癌治癒切除率, 胃癌転移形式

はじめに

胃癌患者の年齢層, 性別と進行状態を対比して検討する目的で, 昭和53年から57年末に至る5年間に於ける教室および名古屋近郊の教室関連10施設の胃癌手術症例, 男性580例, 女性305例, 合計885例を集計した。この結果, 性別, 年齢層により進行度に大きな差異を認め, 手術により治癒の期待できる症例の占める割合は大きく異なっていた。また腹膜転移, 肝転移, 漿膜浸潤, リンパ節転移といった治癒切除を不可能にする原因にも性別, 年齢により一応の傾向が見られたので考察を加えて報告した。

〔I〕胃癌手術症例の分布

胃幽門側切除は男性391例, 女性207例で合計598例, 胃全摘は男性106例, 女性56例で合計162例, 幽門側切除, 全摘を併せた切除総数は760例となる(表1)。幽門側切除群, 全摘群はともに男性65.4%, 女性34.6%よりなり, 幽門側切除, 全摘施行症例の男女比は一致した。また全摘症例は切除数の21.3%を占めている。一方切除不能で開腹術のみに終わった症例は116例で, 男性75例は男性手術総数の12.9%, 女性41例は女性手術総数の13.4%であり, 男女比は男性64.7%, 女性35.3%と切除例の男女比と差は無い。残胃癌手術例は男性8例88.9%, 女性1例11.1%と少数例ではあるが, 男性例の占める割合が極端に高かった。

全手術症例の平均年齢は, 59.0歳で, 男性59.2歳,

<1984年2月15日受理> 別刷請求先: 片岡 誠
 〒467 名古屋市瑞穂区瑞穂町川澄1番地 名古屋市
 立大学医学部第2外科

表1 胃癌手術症例分布

切除項目	例数	平均年齢	標準偏差
幽門側切除	男	391	59.5
	女	207	59.0
	計	598	59.3
胃全摘	男	106	57.0
	女	56	55.6
	計	162	56.5
残胃癌手術	男	8	58.6
	女	1	55.0
	計	9	58.2
非切除(開腹)	男	75	61.1
	女	41	59.9
	計	116	60.7
合計	男	580	59.2
	女	305	58.5
	計	885	59.0

図1 切除症例の年齢別、Stage分布

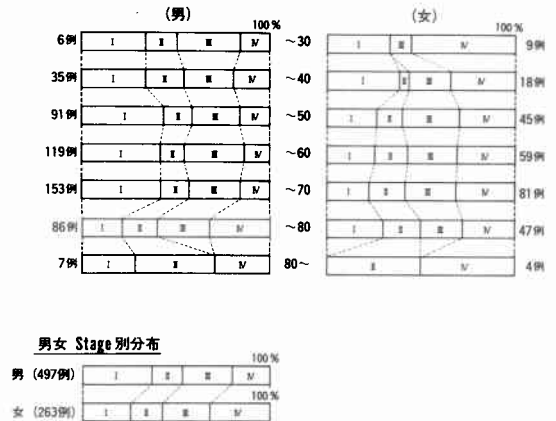


表2 切除例のstage別症例分布

手術stage	(I)	(II)	(III)	(IV)	合計	
幽門側切除	男	167	68	91	65	391
	女	64	35	47	61	207
	計	231	103	138	126	598
胃全摘	男	18	12	46	30	106
	女	5	9	21	21	56
	計	23	21	67	51	162
合計	男	185	80	137	95	497
	女	69	44	68	82	263
	計	254	124	205	177	760 (例)
各stageが占める%	男	37.2	16.1	27.6	19.1	100
	女	26.2	16.7	25.9	31.2	100
	計	33.4	16.3	27.0	23.3	100 (%)

女性58.5歳であったが、とくに全摘施行例の女性では55.0歳、男性は57.0歳と若年傾向を示した。

〔II〕 Stage別症例分布

幽門側切除症例のStage分布が男女で比べると、男性例においてStage Iが167例ととくに多かったが、女性例ではStage Iが64例StageIVが61例と、Stage I, IVの間に差は見られない。一方全摘例を比べると男女を問わずStage III, IV症例が多い(表2)。

幽門側切除、全摘例を併せた切除例に対する各Stage別の%を最下段に示したが、男性においてStage Iが37.2%と最も多かったのに反して女性ではStage IVが31.2%と多く、Stage II, III, の占める割合は男女間に差を見ない。男性、女性症例を含めた全幽門側切除例においてはStage I, IIの占める割合が55.9%、Stage III, IVの占める割合は44.1%であったのに対し、胃全摘ではStage I, IIが27.1%、Stage III, IVが72.9%と胃全摘術は進行症例に多く施行されている。

〔III〕 切除症例の年齢別、Stage分布

男性において、大多数の症例を占める41歳以上70歳未満の間で、Stage Iが41~43%と高率であったが、71歳以上の高齢者ではStage Iが21.5%と低率である(図1)。これに反して女性では41歳以上80歳未満の間でStage Iの占める割合は30%未満と低率である。一方Stage IVを見ると男性では症例の最も多い51歳から60歳で14.3%、61歳から70歳で16.3%と低率であるが、71歳以上の93例では32.3%と高率であった。女性例では症例の多い41歳以上80歳未満でも30%前後を示し、少数例ではあるが、30歳未満の55.6%、80歳以上の50%と進行症例の占める率は高い。

〔IV〕 治癒切除率

残胃癌9例を除く手術症例876例のうち絶対治癒切除402例、45.9%(男性50%、女性38.2%)相対治癒切除149例、17.0%で絶対治癒、相対治癒切除を併せると、手術症例の62.9%(男性68.2%、女性56.6%)に治癒切除を行ったこととなる。切除不能例を除く切除760症例では72.5%に治癒切除が行われている(表3)。これを男女別に見ると男77.7%、女65.2%と男女差は明瞭である。また男女おのおの切除症例のうちに占める絶対非治癒切除の割合は男性14.1%、女性28.1%と絶対非治癒切除の女性切除例に占める割合は高い。平均年齢を比較すると男性の場合、非治癒切除例および開腹非切除例に比べ治癒切除例が若い傾向を示すが、女性例では手術根治度と年齢に関連を示さない。

次に年齢別治癒切除分布を図2に示した。絶対治癒、相対治癒切除を併せた治癒切除症例の全手術症例に占める比率を男性例で見ると41歳から50歳の100名で76.0%、51歳から60歳の141名で70.2%、61歳から70歳

表3 手術根治度別症例分布

切除項目	例数	平均年齢	標準偏差
絶対的 治癒切除	男	286	58.5
	女	116	58.0
	計	402	58.3
相対的 治癒切除	男	98	57.8
	女	51	58.5
	計	149	58.0
相対的非治癒切除	男	43	60.0
	女	22	60.0
	計	65	60.0
絶対的非治癒切除	男	70	61.6
	女	74	58.4
	計	144	60.0
非切除 (開腹)	男	75	60.1
	女	41	58.4
	計	116	59.8
合計	男	572	59.0
	女	304	58.5
	計	876	58.9

図3 手術根治度別手術件数

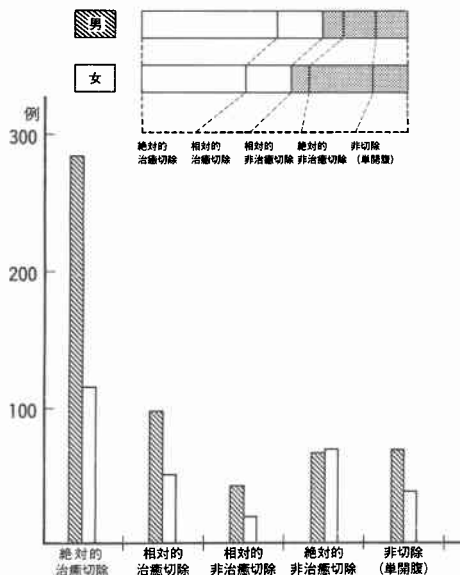
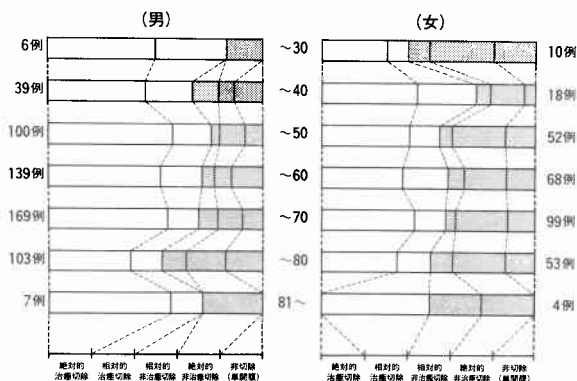


図2 年齢別治癒切除分布



の172名で68.6%であったのに対し、106名の71歳から80歳では51.8%と治癒切除の占める割合は目立って減少している。一方女性例では症例の多い41歳以上80歳未満の各年齢層で治癒切除は50%台にとどまっている。手術症例に占める割合を男女比較すると男性では絶対治癒切除の占める率が、女性は絶対非治癒切除の占める率が高い。しかも図3に見るように、症例数の上からも、絶対非治癒切除群では女性例がわずかではあるが男性例をしのいでいる。

〔V〕絶対非治癒切除および開腹非切除例

絶対非治癒切除となった144例、開腹し切除不能であった症例116例の合計260例について検討を加えた(表4)。これは残胃癌を除く全手術症例876例の29.7%であり、男性では145例、25.3%、女性では115例、37.8%にあたる。このような手術に終わった原因として最も影響したものを各症例について1項目づつ原発巣T、浸

表4 開腹非切除、絶対非治癒切除となった原因

理由	項目	例数	平均年齢	標準偏差
T	男	5	57.0	11.7
	女	4	51.8	12.3
	計	9	54.7	11.5
S	男	34	62.5	13.9
	女	30	62.3	15.0
	計	64	62.4	14.3
P	男	53	57.3	12.7
	女	53	54.4	11.5
	計	106	55.8	12.1
H	男	29	67.4	11.7
	女	12	65.9	5.5
	計	41	67.0	10.2
N	男	24	60.4	13.4
	女	16	63.5	13.8
	計	40	61.6	13.5
合計	男	145	61.0	13.3
	女	115	58.8	13.1
	計	260	60.1	13.2

膜浸潤S、腹膜転移P、肝転移H、リンパ節転移Nに分類すると、その頻度はP、S、H、Nの順となった。この結果を男女別に比をとって図4に示した。男性症例に比べ女性症例ではPが進行している症例が多いこと、男性においてはHの進行した症例が女性に比べて多いことが示されている。これらの症例の年齢を比較すると平均年齢では、P因子が原因となった症例は若く、とくに女性症例の約半数を占めるこの群では54.4歳であった。これに対しH因子を原因とした症例では男67.4歳、女65.9歳と他群に比して明らかに高年齢層であった。またS因子を原因とした症例では男

図 4

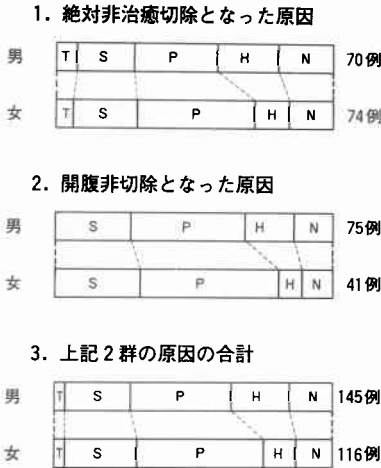


表5 年次別にみた切除率、治癒切除率

	胃切除 全手術	治癒切除 全手術
1965年	74.6%	49.4%
66	75.1	50.0
67	76.7	51.2
68	76.9	52.0
69	77.2	53.0
70	79.0	53.6
71	79.1	54.7
72	79.6	56.4
73	80.6	57.0
74	81.7	57.5

(全国胃癌登録1965-74年より)

表6 胃悪性新生物の年次別、性別死亡数及び訂正死亡率

	1976年	1977年	1978年	1979年	1980年
男性死亡数 (男女%)	30,537 (61.0)	30,326 (60.5)	30,136 (60.8)	30,777 (60.8)	30,845 (61.1)
女性死亡数 (男女%)	19,555 (39.0)	19,806 (39.5)	19,428 (39.2)	19,843 (39.2)	19,998 (39.9)
計 (例)	50,092	50,132	49,564	50,623	50,443
訂正死亡率 男	35.6	34.1	32.9	32.4	31.6
人口10万対 女	22.1	21.6	20.4	20.1	19.3

(厚生省人口動態統計より)

62.5歳、女62.3歳と高齢でありP因子を原因とした症例とは明らかな年齢差が見られた。

考 察

胃癌に関する全国集計は胃癌研究会と国立ガンセンターの手で行われており、きわめて詳細な結果が報告されている¹⁾。表5は全国胃癌登録の年次別胃切除率、治癒切除率を示した。1965年以降切除率は9年間に7.1%の増加を示し、1974年には81.7%に至っている。われわれの集計では1978年から1982年末に至る5年間の切除率は86.8%（男86.9%、女86.5%）を示し、同様の伸びを示すと仮定すると、予想される切除率に近い数値と考えられる。全国集計における全手術症例に対する治癒切除の割合もまた1965年以降8.1%の増加を示し、1974年では57.5%を示しているが、最近5年間のわれわれの集計で得られた62.9%（男性68.2%、女性56.6%）も同様に予想される切除率に近い数値となる。一方、男女比を全国登録症例と比較すると1969年から1973年までの5年間に集計された11,845例では男性7,727例(65.2%)、女性4,118例(34.8%)であり、この値はわれわれの集計した残胃癌を除く胃癌手術症例の男女比、男性65.3%、女性34.7%と合致している¹⁾。しかし表6に示した厚生省人口動態統計の胃悪性新生物の年次別、性別死亡数(1976年から1980年)の男性約61%、女性約37%と比べると男性の比率が高い^{2,3)}。このように死亡例に比べ手術例でより男性の占める割合が高いことが明らかとなったが、今回の集計で示した男性症例はStage I、絶対治癒切除の占める率が高いのに反して女性症例ではStage IV、絶対非治

癒切除の占める割合が大きいことに関連することは明瞭である。因みに今回のわれわれの集計では非治癒切除、非切除症例を併せると325例であり、このうち男性188例は57.8%、女性137例は42.2%となり、性別死亡数の比に近い数値となる。

年齢別に進行度を見ると男性では40歳未満と71歳以上でStage Iの占める割合が低く、とくに71歳以上80歳の間の男性例は106例と症例も多い。一方女性例では年齢層に大きな偏りが無く、とくに症例の多い41歳以上80歳未満でStage Iの占める率が低いことは注目値する。

開腹非切除、絶対非治癒切除となった原因を項目ごとに示した平均年齢に見られる如く、手術を手遅れにした因子にも性別、年齢により一応の傾向が見られる。とくにH因子が原因と考えられた症例には高齢男性が多く、P因子は若年女性に多い。またP因子に比べS因子を原因とした症例は高齢者に多く、S因子進行症例とP因子進行症例とは異なる症例群と考えられる。

今後治癒率の向上のためには男性70歳以上の高齢者と、女性のすべての年齢層に高率に見られる進行癌を早期に発見治療することが強く望まれる。高齢者の手術に関しては術前、術後の患者管理の向上と麻酔法の進歩により、手術による合併症の発生は著しく減少し

た⁴⁾、高齢者および高齢者を抱える家族に対し、積局的治療の意義を啓蒙することにより、治癒率の向上を望むことは可能である。女性症例において進行症例の占める割合の高い原因として、第1に女性は男性に比べ検診を受ける機会が少ないこと、第2に女性に発生する胃癌の生物学的特性⁵⁾、若しくは女性の生体環境の違いにより、癌の進展速度に差が生ずることが考えられる。確かに若年女性にスキルス胃癌の占める割合が高く⁶⁾、P因子の進行症例が多い等⁸⁾、女性胃癌には男性の胃癌とは異なった特性が見られ、早期発見の難かしさが存在する。このように女性胃癌の治癒率の向上には、男性の場合より複雑な要素が存在すると思われるが、女性胃癌の早期発見が胃癌の治癒率の向上に不可欠な事項であり、今後、われわれに課された解決すべき難問である。

おわりに

最近5年間の胃癌手術例885例を集計し、年齢層、性別を対比し検討することにより興味ある結果を得た。症例の男女比は男性64.7%、女性35.3%と男性に多く、胃幽門側切除群ではStage I, IIの占める割合が、55.9%と過半数であったのに対し、胃全摘群ではStage III, IVが72.9%ときわめて多かった。治癒切除は男性68.2%に対し、女性は56.6%と低率を示したが、これは男性では71歳から80歳においてのみ進行症例が

高率であったのに比べ、女性はほぼ全年齢層に進行症例が高率に存在したことに因る。また開腹非切除および絶対非治癒切除に終った症例のうち、肝転移を原因とする症例は高齢男性例に多く見られ、腹膜転移を原因とする症例は女性例に高率で、若年傾向を示した。

文 献

- 1) 胃癌研究会、国立がんセンター編：全国胃癌登録調査報告、第14号、胃癌研究会・国立がんセンター、東京、1983
- 2) 多賀須幸男：胃癌。日臨 41：1324—1335、1983
- 3) 厚生省統計情報部編：昭和55年人口動態統計。厚生統計協会、東京、1982
- 4) 阿部稔雄、片岡 誠、正岡 昭ほか：座談会、高齢者の手術適応について。現代医 30：253—277、1982
- 5) 北岡久三、吉田茂昭、大倉久直ほか：胃スキルス内分泌化学療法。代謝 20：237—248、1983
- 6) 中村恭一、菅野晴夫、丸山雅一ほか：Linitis plasticaの原発巣についての病理組織学的研究。胃と腸 10：79—86、1975
- 7) 美園俊明、中村恭一、加藤 洋ほか：Linitis plastica型胃癌の臨床病理学的研究。胃と腸 17：691—698、1982
- 8) 中島聰總、及川隆司、大橋一郎ほか：進行胃癌における術中腹腔細服診の臨床的意義。癌の臨 23：27—34、1977